

上齋原に墜落した輸送機

燕岳号の悲劇

今から66年前、太平洋戦争末期の昭和20年5月20日、旧日本軍の重要任務を帯びて朝鮮半島から内地へ飛来した輸送機が、その帰路大阪を離陸後に消息を絶ち、行方不明となりました。このことは、当時は軍の機密により公表はされませんでした。

それから2年後、戦後間もない昭和22年2月、上齋原の若者達が遠藤国有林地内に狩猟に行った際、雪の山中に飛行機の翼のようなものを見出し、津山警察署に連絡。実地調査の結果、数名の遺骸と遺留品を発見しましたが、積雪が多く正式な調査は春以降に実施することとなり、4月に現場を調査した結果、この飛行機が前述の行方不明となった輸送機であることが明らかになりました。

この輸送機は、大日本航空(株)から徴用した陸軍特務航空輸送部の「燕岳号」で、乗員13名を乗せて大阪を飛び立った後、標高約1200mの遠藤国有林地内の山腹に突き当たり、機体は炎上したものとされました。幸い残雪のため、山火事は起こらなかったものの、山深い場所であった

ため、2年もの間発見されず、現場に残された遺骨は座席にそのまま白骨になった者もありましたが、機体から10数m離れた谷川で倒れていた者などもあり、墜落時には生存者がいたことがうかがえました。

この燕岳号は、九七式重爆撃機一型をベースに再設計された輸送機で、軍用機としての名称を一〇〇式輸送機、民間型の名称をMC-20と呼ばれたものにエンジンの換装等を行った二型で、MC20-IIという型式の輸送機です。三菱重工業で開発・製

造されたもので、軍用民用合わせて二型は国内の輸送機として最多の406機製造し、昭和20年1月以降は日本国際航空工業に製造業務が移管されました。

墜落の原因は定かではありませんが、木の枝をプロペラで切ったような形跡があったため、悪天候による視界不良が原因であったと考えられています。町には現在でも燕岳号の尾輪が保管されていますが、炎上したことを物語る煤が付着しています。

(写真1)

乗員13名のうち、6名は操縦士等の乗務員ですが、残る7名は朝鮮総督府の知事や交通局書記官ほか朝鮮半島で従事する便乗者でした。

遺骨は所持品や印鑑等により全員が確認され、事故後3年を経た昭和23年5月20日に上齋原村によって樽



写真1 燕岳号の尾輪



写真3 墓碑に刻まれた殉職者



写真2 殉職者の墓碑



写真4 墜落現場での50年忌法要(平成7年)

原の村有墓地に埋葬し、慰霊祭を執行了しました。

その後、昭和36年には遺族の尽力と村の協力により新しい墓標を建立し、国道改良のため墓地移転した平成7年には遺族・関係者を招き50年忌の法要を実施しました。

戦時中の不幸な事故ではありますが、上齋原の皆さんの長きにわたる手厚い供養によって、現在でも忘れられることなく、町の歴史に刻まれています。

参考資料：『上齋原村史』通史編・地区誌

広報かみの98号・100号

上齋原村公文書

フリー百科事典『ウィキペディア』

お問い合わせ先

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733